



**研究テーマ** :住民の河川利用によって生み出される里川に関する研究

**研究者** :中西章敦

NAKANISHI Akinobu  
(工学部建築学科 准教授)

**【研究・開発の目的】**

自然環境の保全や生物多様性の重要性が再認識される中で、アンダーユース (= 人間と自然との関わり) の減少による生物多様性の危機については、かつての自然の中での生活から現代の都市型の生活様式への変化のために進んでいないのが現状です。

古来、日本が自然を使い、守り、共生してきた里地・里山と同様に、川を利用し、保全、そして未来へ繋ぐ『里川』という概念をもとに、そのあるべき姿を明らかにし、近年の川づくりに加えて里川づくりを行っていくことが本研究の目的です。

**【研究・開発のきっかけ】**

前職で大分県庁土木技術職員として土木事業に従事し、大分県内で多くの河川改修や川づくりに携わってきた経験をもっています。地域の防災のために河川改修を望む流域住民と、自然保護活動に取り組む環境団体との合意形成を図る中で、国土交通省が推進する多自然川づくりだけでなく、人と川との関わりを保全することの必要性を認識し、現在の研究の着想に至りました。

**【研究・開発の概要】**

川と流域住民が密接に関わっている川を里川とし、住民と河川との関わりや、その空間構造と特性を明らかにし、今後の里川づくりの基礎としていきます。現在、大分県内では、水田耕作や漁労、川遊びなど、日常生活やレジャーで密接に川と関わりのある一級河川大野川水系の本川・支川、湧水群や峡谷などの水文化、自然を畏敬した庄内神楽や、湯布院の温泉文化など、文化的に川と関わりの深い一級河川大分川水系の本川・支川を対象に研究を進めています。空間構造などの物理的な指標に加え、水質や水生生物の調査、住民の河川に対する意識調査などを行い、人と川との関わりの向上を模索します。

**【研究・開発の特色】**

環境省の行うSATOYAMAイニシアティブでも取り扱う里地・里山、これらをもとに海域の利活用と保全をうたう里海は研究が進んでいますが、川は古くから利用形態の種類も多様にわたり、地域毎に様相も異なるため、世界でもあまり研究が進んでいない『里川』についての研究は特色があります。流域毎や利用形態毎にそれぞれの里川が見せる表情も異なりますが、大分県発で里川概念を広め、上流の里山から海域の里海までを、里川によって繋いでいきます。

**【今後の展開】**

現在は大野川水系、大分川水系と流域の広い一級河川で研究を進めていますが、今後は流域の小さい二級河川やその支川、住民にとって最も身近な近所の川を対象に研究を進め、流域住民一人一人が自分自身の心の里川を意識できるようにしていきます。

**【今後の課題】**

流域として総合的に川と関わることを前提とするため、流域住民に加え、流域の行政や小中学校の児童・生徒など、多くの人との関わりが課題となります。里川研究は研究者だけのものではなく、流域に生きている老若男女一人一人が、里川づくりは自分自身のものであるという意識付けができるようになることが目標です。

**【その他の情報】**

川づくりの実績：玉来川かわまちづくり (令和元年～)、芹川かわまちづくり (令和元年～)、豊かな水環境創出ふるさとの川づくり大学 (令和元年～)、庄内『水の輪』会議 (令和2年～)、挾間水辺空間利活用推進会議 (令和2年～)



**【地域・企業へのメッセージ】**

自然環境の保全と利用、防災はそれぞれ相反するものではありません。利用することで保全できる自然、自然を破壊せずに防災機能を高めるなど、人と自然とが本当の意味で共生できる川づくりをはじめてみましょう。